

子どもの新しい変化（「荒れ」）と教職に関する研究

—小中学校の担任教師調査結果から—

A Study on the New Change of Children ("Disolanting") and Teaching Profession

松 浦 善 満（教育実践教室）、中 川 崇（大学院生）

Yoshimitsu MATSUURA, Takashi NAKAGAWA

<抄録>

近年、小学校において授業が成立しない、いわゆる「学級崩壊」現象が増加しており少なからぬ教師が休職あるいは退職に追い込まれているという。しかしながらそれらの実態は必ずしも明らかではない。本研究では小中学校の学級担任教師を対象にしたアンケート調査によって、学級の荒れの実態と教師の対応、ならびに教職意識を明らかにした。その結果、授業を中心にした子どもたちの「荒れ」は中学校だけでなく小学校にも、また教職経験や性差にかかわらず広がりつつあることがわかった。また「荒れ」に対する教師側の対応が様々な形で模索されていることが明らかになった。

<キーワード>：教師調査，授業不成立，「学級崩壊」，新しい「荒れ」

1. はじめに—問題設定—

いま、中学校だけでなく小学校においても、授業が成立しない状況が広がっている。たとえば授業中の私語やエスケープ、教師への反抗などが頻発している。

しかも担任教師の教職経験の長短にかかわらずどの学級でも問題が生じ、指導に窮した少ない教師が疲労困憊し休職や退職に追い込まれている。とりわけ小学校では学年の持ち上がり制を廃止したり、教科担任制を導入する学校も見られる。しかしながら事態の深刻さにもかかわらず、子どもたちの意識や行為の変化とこれに対応する教師側の状況については必ずしも明らかにはなっていない。

それは、授業不成立に典型的に見られるように子どもたちの「荒れ」が学級を場にして教師への反抗や攻撃となって表れているために、担任教師自身が問題を抱え込み実態そのものが外部に明らかにされることが少ないからでもある。したがって問題がかなり深刻化した段階で、それは学級担任が休みだしたり休職する段階になってはじめて学校全体の問題になることから伺える。しかしながら、これらの事態に対して教師や学校は手をこまねいているわけではなく様々な取り組みを模索している。

本研究ではこれらの教師側の対応や取り組みの実態についても明らかにしようとした。

2. 調査の目的と方法

(1) 調査の目的と分析の枠組み

ア. 研究の意図

新しい「荒れ」と「学級崩壊」に関して、竹内（1997）^{*1}、村山（1998）^{*2}、佐藤（1998）^{*3}らによる研究があるが、それらはいずれも事例的研究であり定量的な実態調査研究ではない。

例えば、佐藤は「東京都内の小学校高学年の教室では、数校に一教室ぐらいの割合で『学級解体』が進行している」とし、「『学級解体』に悩んでいる教師の多くは、実力も実績も誇ってきた中年の女性教師である」（雑誌『世界』1998.1）と述べているが、この事実認識は果たして妥当だろうか？

佐藤による「事例的真実」を軽視するものではないが、もしそれが妥当ならば高齢の教師、若い教師、男性教師、あるいは「実力のない教師」（佐藤）には「学級崩壊」が起こらないのだろうか、といった疑問が起きる。

本調査ではまず、こうした「荒れ」や「学級崩壊」の広がりや深さの実態、及びこれに関わる教師の属性分析を行なうこと。さらに教師や学校が子どもの「荒れ」や「学級崩壊」に手をこまねているわけではなく、なんらかの対応や努力をしているので、その実態についても明らかにしようとした。

とりわけ、小学校での「荒れ」は学級を場にして生起しているので、調査対象を学級担任教師に限定し、しかも学級での一年間の「荒れ」の実態を把握するため調査実施時期を教師にとって最も忙しい学年末に設定した。

しかし、本研究の調査対象や調査方法には多くの限定があり、そのために新しい「荒れ」のすべての状況を盛り込み、「荒れ」の起因するメカニズム全体を明らかにすることはできない。例えば、今回の調査では担任教師の捉らえた学級の実態や対応については明らかになったが、子ども側からの「荒れ」への関与やその意識を把握できていない。

その意味で本研究は、新しい「荒れ」、「学級崩壊」に関する研究の基礎的作業の一部であると言えよう。したがってこうした作業は深刻化する子どもと教師の問題への克服への道を見い出すものではあるが、かといって本研究からすぐさま解釈に直接結びつく結論を導き出すことを意図したものではない。それは新しい「荒れ」、「学級崩壊」といった現象がただ単に教師と子どもの関係に起因するミクロな次元の問題だけでなく、急激に変化する現代社会と日本の学校教育制度とのズレや軋みといったマクロな問題をも包み込んだ複雑な構造をもっているからである。

イ. 分析の枠組

本調査は新しい「荒れ」を学級レベルで捉らえるために調査対象をあくまでも学級担任教師に限定している。

したがって調査票は学級の「荒れ」と教師がどのように関わっているのかといった実態を見ることに力点を置いて作成している。また「荒れ」にかかわる教師の対応や意識をみるために調査仮説を設定している。

図Ⅰ－1は調査仮説を概念図に表わしたものである。

第Ⅰ群の属性変数群には校種、性別、年齢、教職経験年数、現在の学校での勤務年数、担当学

年、学校校区の地域類型、などの他に、本年度担当学級が持上がりかどうか、学年の学級数、担当学級のクラスサイズ、さらに小学校ではよく担当する学年経験などの項目を設定した。

第Ⅱ群は学級、学校の「荒れ」変数群である。とくに学級の「荒れ」の実態をみるために選択カテゴリーを20項目に具体化した。また、担任教師が注意するとカッとなってキレる子どもがどの程度いるのかその人数を問う設問を設定した。さらに自学級と他の学級の学級経営の困難度と病欠、休職の有無を尋ねた。なお学校全般の「荒れ」に関しては民研プロジェクト『学校』が実施した調査項目をパネル質問として援用させていただいたが今回は調査分析から割愛した。

第Ⅲ群は「荒れ」の要因に関する教師の意識をみるための項目（27問）を設定した。

第Ⅳ群は「荒れ」への対応について、学級担任の持上がり制の廃止、小学校での教科担任制の導入、「荒れ」に対する校内での研修や話し合いの有無、校外での研修会への参加意思や参加経験を設問している。

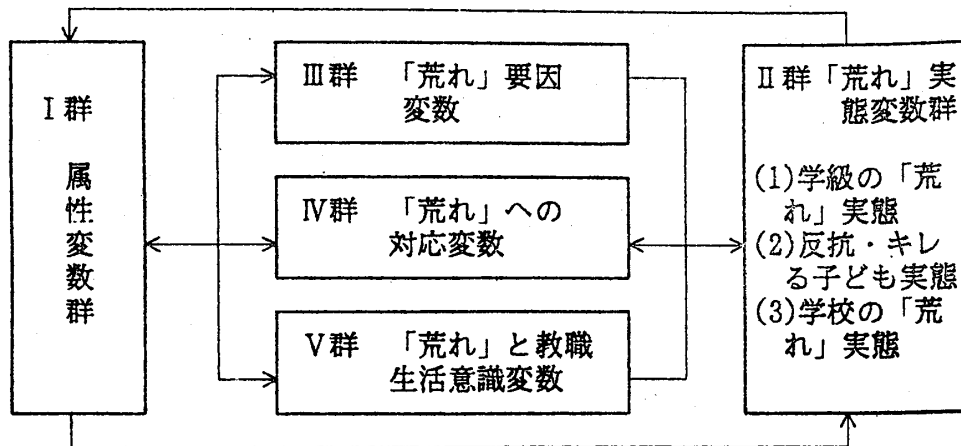
また、「荒れ」を克服する上での学級サイズの希望、およびナイフや危険物などの持ち物検査についての是非を設問した。

第Ⅴ群は日常の教職生活上の課題意識を20項目設定した。とくに教師が子ども理解のズレや困難をどの程度抱いているのかに関して重点的に設問した。

その他、「キレたり」「パニック」をおこす子どもの特徴やその対応について自由記述欄を設定した。

調査の枠組みは第Ⅰ群の属性変数群と第Ⅱ～Ⅴ群の従属変数群との関連性をみることに基本的重点を置きつつも、第Ⅱ群の学級の「荒れ」の深度と広がりなどが他の従属変数とどのように構造的に関連しているのかに注目している。例えば、第Ⅴ群の「荒れ」への対応と「荒れ」の実態との関連などをみることによって「荒れ」の克服への示唆が得られる。

図Ⅰ—1 調査仮説の枠組み



(2) 調査の方法と標本

ア. 調査対象と標本抽出

調査対象は大阪府内のK市、S市、和歌山県内のW市の3地点の小・中学校教師で平成9年度（1997年度）学級を担任している教師600名（小学校350、中学校250）を教員名簿をもとに、年齢構成、担当学年、男女比率を考慮し無作為に抽出した。なお母集団との標本誤差を5%以内に設定した。

イ. 調査の方法・実施時期

調査方法は調査対象教員が勤務する学校への留置集合調査法を用い教師による自記式とした。
調査期間は年間の学級の「荒れ」の実態を把握するため学年末（1998年2月25日～3月11日）の2週間とした。

なお本調査にあたり大阪府内H市の教師を対象に事前調査を実施し調査票の有効性を確認した。
また調査票の作成にあたってはK市の教員との懇談会をもち修正意見を取入れた。

ウ. 回収結果

最終的に得られたサンプルは小学校266, 中学校146, 総計412サンプル, 有効回収率は68.7%であった。

なお校種, 男女別標本数は表1—1のとおりである。

表1—1 校種別・男女別標本数

| | 男性 | 女性 | 合計 |
|-------|------------|------------|-----------|
| 小学校教師 | 63(23.7%) | 203(76.3%) | 266(100%) |
| 中学校教師 | 71(48.6%) | 75(51.4%) | 146(100%) |
| | 134(32.5%) | 278(67.5%) | 412(100%) |

(3) 新しい「荒れ」の定義と作業仮説

ア. 新しい「荒れ」とは

「荒れ」とはもともと1980年代の校内暴力に代表される中学, 高校生達を中心にした対教師暴力や器物破損行為など生徒の攻撃行為を指して使われる言葉であった。したがって「荒れ」の渦中にある生徒はいわゆる「ツッパリ生徒」や「不良生徒」としてラベリングされた生徒たちであり, 彼ら彼女達は服装や髪型によっても一別することができた。そして「荒れ」の広がりや深度はこれらの生徒たちの人数（量）と彼らの攻撃行為が学校や教師の指導ラインを突破して両者の教育的関係性が崩れる度合いによって判断することができた。

しかし, 近年の子どもたちの間に広がっている「荒れ」はかつてのそれとは様相が違っている。それはしばしば「フツウの子どもの突発的な攻撃行為」であり, しかもその場では「明白な理由が見当たらない」場合が多く, これらの行為が小学校段階にまで「年齢下降している」として特徴づけられている。

これらの特徴は現象的に見られるもので, 「フツウの子ども」という「普通」についても十分吟味しなければならないが, 学校現場からはかつての「荒れ」とは違う特徴としてこれらの指摘は共通している。

このことは本調査でも一定明らかにされるが子どもたちの「荒れ」が従来より拡大し一般化していることを示しているのである。

イ. 新しい「荒れ」の概念をめぐって

もともと「荒れ」という言葉は, 学校現場とりわけ生徒指導のレベルで教師たちが子どもの状態や学校の状況を判断する物差しとして「落ち着いているか」「荒れているか」といった形で使っ

ており、「荒れ」そのものに明確な定義づけがあったわけではない。また、いじめや登校拒否のように必ずしも学問的に定義づけられてきたことはなかった。

本調査にあたって、曖昧模糊とした「荒れ」概念をどのように定義づけるか苦慮した。たとえば村山は新しい「荒れ」を《以前の「荒れ」とは違った特徴を有する子どもの攻撃行動》と概念規定しているが、このように「荒れ」を単に攻撃行動とすることにはいくつかの問題がある。それは「荒れ」というのは先ほど述べたように、教師側から見た子どもの状況を推し量るカテゴリーであり、子ども自身は「荒れているかどうか」を認識しているわけではない。さらに、攻撃行動という広義の概念では、いじめや家庭内暴力なども「荒れ」に含まれることになり、従来からの子どもたちの「問題行動」全般を包含してしまうことになる。そこで本調査では、村山の「攻撃行動」を参考にしつつも以下のように定義した。

〈「荒れ」とは、子どもたちの攻撃行動によってもたらされる学校、学級規範への逸脱ならびに日常の教師の教育活動の機能不全の状態〉として定義づけた。

そこで新しい「荒れ」という場合には、すでに指摘したように1980年代の「荒れ」とは違った様相を加味することになる。その際以下の様な諸点が整理される。

新しい「荒れ」の特徴の第一は、子どもの突発的な攻撃行為で背後に要因をもってはいるが表面的には明確な理由が見えない場合が多い。

第二は、ふだんは学校や教室の秩序に適応している子どもが教師や友人へ攻撃行為を行なう場合が多い。（いわゆる「非行少年」ではなく「普通の子ども」「よい子」の問題行動とも呼ばれる）

第三は、最近では中学校だけでなく小学校の低学年まで見られる子どもの攻撃行為である。

第四は、攻撃行為が教師の日常の指導への反発・無視という形で主に学級の中で立ち現われるため、授業の不成立・「学級崩壊」といった事態に発展し、しばしば担任教師が心身疲労の極に達し休職や退職に迫られる事態が現われる。

ウ. 本調査での作業仮説—学級という場に限定する意味—

本調査では、上記の特徴の第四に特に着目し、しかも「荒れ」を学級という場に限定した。このことは作業仮説を具体化し調査票（設問2）のカテゴリー化を図る上で有効であるだけでなく、中学校から小学校に移行しつつある「荒れ」の典型的状況として見られる授業不成立・「学級崩壊」の実態を明らかにする上でも有効であると考えたからである。

そこで表1—2に示したように、学級での「荒れ」を見る指標として「1, 授業への不適応」, 「2, 授業への反発と逸脱」, 「3, 友人への攻撃行為」, 「4, 教師への攻撃行為」, 「5, 学級生活, 規範への反発」の5点からそれぞれ設問肢をカテゴライズした。

表1—2 学級での「荒れ」の指標とカテゴリー

| | |
|------------|-------------------------------|
| 1, 授業への不適応 | (Q2—3) 授業中ゲームボーイなどおもちゃで遊ぶ |
| | (Q2—4) 授業中マンガを読む |
| | (Q2—5) 授業中こっそりお菓子を食べる |
| | (Q2—8) 授業が始ってもすぐに教科書やノートを出さない |

| | |
|----------------|---|
| 2, 授業への反発, 逸脱 | (Q 2—1) 授業中立ち歩く (Q 2—2) 授業中無断で教室から出て行く (Q 2—9) テストや配付物を破ったり捨てたりする (Q 2—14) 担任が出張などでいない時（自習中）に騒ぐ (Q 2—6) 授業中ケンゴムや物を投げる |
| 3, 友人への攻撃行為 | (Q 2—7) 授業中友達を叩いたり、いたずらをする (Q 2—13) 弱いものをいじめる (Q 2—16) 人の物が隠されたりなくなったりする |
| 4, 教師への攻撃行為 | (Q 2—12) 教師の注意や叱責に反抗する (Q 2—20) 先生に暴力をふるう (Q 2—15) 他の学級の先生の注意や叱責に反抗する |
| 5, 学級生活・規範への反発 | (Q 2—10) 学校にお菓子をもってくる (Q 2—11) 弁当や給食が散乱する (Q 2—17) こっそりタバコをすう (Q 2—18) ナイフを学校にもってくる (Q 2—19) 携帯電話やポケベルを学校にもってくる |

3. 調査結果の概要

(1). 新しい「荒れ」の実態

ア 小学校に広がる「荒れ」（後掲資料 表2—1～6参照）

調査結果から中学校での「荒れ」が小学校にも広がってきていることが明らかになった。

とくに小学校では、「授業中立ち歩く」（65.7）「授業中ケンゴムや物を投げる」（48.5）「授業中無断で教室からでていく」（23.5）といった授業不成立に連なる行為が多く、多くの教師に確認されており、しかも「教師の注意や叱責に反抗する」（47.3）「他の学級の先生の注意や叱責に反抗する」（26.6）など教師への反発も広がっている。

また、「テストや配付物を破ったり捨てたりする」（51.7）いわゆる「キレル」に相当する行為も多い。

この傾向は小学校高学年（5・6年生）に特に顕著であり、中学校とほぼ同程度であった。

「荒れ」の実態は教師の性差や経験年数にかかわらず確認されている。

なお、ナイフを学校にもってくる行為に関しては中学校教師の2割が「たまにあった」と回答している。

イ カッとなって反抗する子ども、キレル子ども—小学校

担任教師が注意するとカッとなり反抗したり「キレ」たりする子どもは小学校に比べ中学校での確認率が高いが、小学校を学年別にみると六年生で6割の担任教師が一名～複数名「いる」「当初いた」と回答しており、全体のピークを形成している。また注目したいのは小学校一年生でも二割近い教師が「いる」と回答している点である。

なお、教師の性差、年代に差はみられなかった。

(2). 「荒れ」に対応する教師と学校

ア 学級経営の困難に直面する教師

長い教職生活のなかでどの教師も学級経営の困難を経験する（小・66.0, 中・82.3）のだが、今回の調査結果では現在あるいはつい最近まで困難に直面していた教師が多く、現在の子どもの「荒れ」が教師と指導困難とが対応していることが分った。また指導困難と回答した教師の性差は小学校ではやや男性が、中学校では女性が高い傾向にあった。

イ 教師のリタイア

近年教師のバーンアウト（燃え尽き症候群）やリタイアの問題が指摘されるが、本調査でも小学校教師の14.7%, 中学校教師の14.7%が自分の勤務校に病欠、休職者がいると回答していた。また退職した教員についても一割の教師が勤務校にいと回答しており、あらためて教師の健康問題が注目される。（なお、この結果は同一校勤務者を含む）

ウ 学級担任システム改革への模索

我が国の小学校は伝統的に学級担任制度を重視してきた。原則的に一人の教師が全教科の授業を行い、かつ低、中、高学年の二年間持上がり制をとる場合が多かった。そのことは教師と子どもとの絆を強める一方、学級の閉鎖制を強める傾向も合わせ持っていた。

調査結果では、このような「学級王国」的なシステムが小学校で揺らいでいることが明らかになった。例えば学級担任の持上がり制については「従来通り持上がる方がよい」（10.5）は少なく、約4割の教師が「5, 6年の持上がりのみ廃止」（6.2）「どの学年も持上がりは廃止べきだ」（34.1）と回答している。但し、「その他」（25.2）「わからない」（24.0）も多く、学級担任システム改革への模索状況が伺える。

他方、教科担任制の導入については賛成は約2割で、慎重論が多数であった。

エ ナイフなど危険物の所持品検査は賛否両立

ナイフなどの危険物の所持品検査については小学校教師の5割、中学校教師の6割強が実施すべきでないと回答しているが、他方、小学校で4割強、中学校教師3割が実施賛成あるいは条件付き賛成と回答している。このようにナイフなどの所持品検査については教師間で賛否が両立している。

オ 「荒れ」克服への意欲は高い

教師は子どもの「荒れ」に決して手をこまねているわけではなく、校内で話し合ったり、校外での研修会があれば参加する意思をもっていることが分った。

(3). 「荒れ」の要因ならびに教職生活について

ア 学校内要因よりも学校外要因へ

教師は新しい「荒れ」の要因をどのように見ているのか。調査の概要に見るように、教師は、教師自身の指導力、学校の規則や競争・過密学習など、教師の身近な問題に要因を求めるよりも、

（勿論その傾向もあるが），親の自立，家庭の養育の問題，子ども自立や発達上の問題，マスコミをはじめとする情報化社会の影響の問題など，どちらかと言えば学校外に要因を求める傾向がみられる。

イ 多忙のなかでも，教職について自省し奮闘する教師像

日常の教職生活に関する調査結果から，教師は仕事の多忙感，過重感を抱きつつも，子どもの「荒れ」と直面し自己葛藤を通して，多面的に教職への振返り（教職への自省）を行っている。

例えば，「子どもとの関係でズレを感じる」，「子どもの気持ちや考えを理解できないことがある」，「自分の教育・指導に無力感を感じる」教師は小・中学校とも7割～9割（「おおいにある」，「まあまあある」の合計）に達する。同時に「子どもとの関係をとるために教師自身が変わることが必要だと思う」，「教師としての仕事にやりがい，生きがいを感じる時がある」教師も同程度いるように，子どもへの指導の困難さに苦しみつつも教師としてのアイデンティティーを模索している。

教師はこのような自省的態度をもちつつも，子どもとのゆっくり話し合える時間的余裕を強く求めている。また問題の解決のためには，親や管理職とよりも同僚と相談する場合が多い。

(4). 学級サイズの現状と希望のサイズ

調査結果では教師が担当する現実の学級サイズと希望するサイズとの間に大きな隔たりがあった。このことは予想されたことではあるが小学校教師は16～20人学級（33.7）21～25人学級（39.5），26人～30人学級に（22.2）に，中学校教師も16～20人（33.3）学級，21～25人学級（27.7），26人～30人学級（34.8）にほぼ全員集約される。

この結果から教師が理想とし強く願っている学級サイズが30人以下であり，現実の学級サイズとの間にズレがあることが明らかになった。

教師の願う範囲の学級サイズを実現させるためには，現行の40人学級から30人学級へと移行することが必要になってくる。

(5). 自由記述について

調査票の最後に，カッとなってキレる子どもの状況や「荒れ」の背景について自由記述欄を設定した。有効票の半数以上にあたる記入票（小147，中90）には子どもの状態と教師それぞれの気持ちがりアルに語られている。

このなかに今日の子どもと教師，学校の問題を解く，いくつもの回答があると思う。これらの記述の分析，ならびにデータ間の多変量解析については後日を期したい。

4. おわりに

今回の調査は子どもたちの新たな変化を教師側がどのように捉え，また対応しているのかその実態を明らかにしたものである。これらの調査はおそらく全国的にも初めてであろうと思われる。したがってその先駆性についてはそれなりの評価はされるであろうが，問題は複雑であり，「荒

れ」のメカニズムを明らかにする上ではなお不十分さがあることはいなめない。今回の調査はあくまでも教師側の把握を見たものであり、今後、子ども自身がこの「荒れ」のなかでどのような意識で対応しているのかその実態を明らかにすることが肝要である。なお本調査にあたって院生の中川崇君にはデータ整理ならびにデータ処理に多大な労力を提供していただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

<注記>

- * 1. 佐藤 学「『学び』から逃走する子どもたち」（雑誌『世界』岩波書店1998.1）
- * 2. 竹内常一「なぜ小学校高学年が“荒れる”のか」（『ひと』太郎次郎社1997.11）
- * 3. 村山士郎「新しい『荒れ』をどう見るかー子どもたちの攻撃性の新局面」（村山編『ムカつく子ども荒れる学校』桐書房1998.5）

5. 資料 ー調査データ抜粋ー

<調査データの見方>

- (1) 調査結果は「荒れ」の特徴を小・中学校別に見るために校種別に対比している。
- (2) 後掲した集計結果は全て、小数点以下第二位を四捨五入しており、比率の合計が100.0%を上下することがある。
- (3) クロスデータの有意差をみるためにカイ二乗検定をおこなった。危険率は $p < 0.005, p < 0.01, p < 0.05$ (nsは有意差なし) であらわしている。
- (4) 各項目の基数 (n) が違うのは調査項目ごとの欠損値を自動的に除外したからである。

表 2—1 授業中立ち歩く

| | 小学校 | | | 中学校 | | | 合計 | | |
|--------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 男性 | 女性 | 合計 | 男性 | 女性 | 合計 | 男性 | 女性 | 合計 |
| よくあった | 23.0 | 14.9 | 16.8 | 25.7 | 23.6 | 24.6 | 24.4 | 17.2 | 19.6 |
| たまにあった | 50.8 | 48.3 | 48.9 | 40.0 | 51.4 | 45.8 | 45.0 | 49.1 | 47.8 |
| なかった | 26.2 | 36.8 | 34.4 | 34.3 | 25.0 | 29.6 | 30.5 | 33.7 | 32.7 |
| N数 | 61 | 201 | 262 | 70 | 72 | 142 | 131 | 273 | 404 |

ChiSquare 3.384ns

表 2—2 授業中ケシゴムを投げる

| | 小学校 | | | 中学校 | | | 合計 | | |
|--------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 男性 | 女性 | 合計 | 男性 | 女性 | 合計 | 男性 | 女性 | 合計 |
| よくあった | 12.9 | 5.4 | 7.2 | 14.1 | 15.3 | 14.7 | 13.5 | 8.0 | 9.8 |
| たまにあった | 46.8 | 39.6 | 41.3 | 59.2 | 70.8 | 65.0 | 53.4 | 47.8 | 49.6 |
| なかった | 40.3 | 55.0 | 51.5 | 26.8 | 13.9 | 20.3 | 33.1 | 44.2 | 40.5 |
| N数 | 62 | 202 | 264 | 71 | 72 | 143 | 133 | 274 | 407 |

ChiSquare 6.227 $p < 0.05$

表 2—3 授業中無断で教室から出ていく

| | 小学校 | | | 中学校 | | | 合計 | | |
|--------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 男性 | 女性 | 合計 | 男性 | 女性 | 合計 | 男性 | 女性 | 合計 |
| よくあった | 6.5 | 5.9 | 6.1 | 11.6 | 13.7 | 12.7 | 9.2 | 8.0 | 8.4 |
| たまにあった | 14.5 | 18.3 | 17.4 | 39.1 | 24.7 | 31.7 | 27.5 | 20.0 | 22.4 |
| なかった | 79.0 | 75.7 | 76.5 | 49.3 | 61.6 | 55.6 | 63.4 | 72.0 | 69.2 |
| N数 | 62 | 202 | 264 | 69 | 73 | 142 | 131 | 275 | 406 |

ChiSquare 0.481ns

表 2—4 教師の注意や叱責に反抗する

| | 小学校 | | | 中学校 | | | 合計 | | |
|--------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 男性 | 女性 | 合計 | 男性 | 女性 | 合計 | 男性 | 女性 | 合計 |
| よくあった | 3.3 | 7.5 | 6.5 | 7.1 | 19.2 | 13.3 | 5.3 | 10.6 | 8.9 |
| たまにあった | 42.6 | 40.3 | 40.8 | 51.4 | 50.7 | 51.0 | 47.3 | 43.1 | 44.4 |
| なかった | 54.1 | 52.2 | 52.7 | 41.4 | 30.1 | 35.7 | 47.3 | 46.4 | 46.7 |
| N数 | 61 | 201 | 262 | 70 | 73 | 143 | 131 | 274 | 405 |

ChiSquare 1.355ns

表 2—5 他の学級の先生や叱責に反抗する

| | 小学校 | | | 中学校 | | | 合計 | | |
|--------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 男性 | 女性 | 合計 | 男性 | 女性 | 合計 | 男性 | 女性 | 合計 |
| よくあった | 14.5 | 3.0 | 5.7 | 8.5 | 12.7 | 10.6 | 11.3 | 5.5 | 7.4 |
| たまにあった | 21.0 | 20.9 | 20.9 | 53.5 | 53.5 | 53.5 | 38.3 | 29.4 | 32.3 |
| なかった | 64.5 | 76.1 | 73.4 | 38.0 | 33.8 | 35.9 | 50.4 | 65.1 | 60.2 |
| N数 | 62 | 201 | 263 | 71 | 71 | 142 | 133 | 272 | 405 |

ChiSquare 11.916 $p < 0.005$

表 2—6 テストや配布物を破ったり捨てたりする

| | 小学校 | | | 中学校 | | | 合計 | | |
|--------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 男性 | 女性 | 合計 | 男性 | 女性 | 合計 | 男性 | 女性 | 合計 |
| よくあった | 6.5 | 6.5 | 6.5 | 26.8 | 35.6 | 31.3 | 17.3 | 14.2 | 15.2 |
| たまにあった | 56.5 | 41.8 | 45.2 | 52.1 | 47.9 | 50.0 | 54.1 | 43.4 | 46.9 |
| なかった | 37.1 | 51.7 | 48.3 | 21.1 | 16.4 | 18.8 | 28.6 | 42.3 | 37.8 |
| N数 | 62 | 201 | 263 | 71 | 73 | 144 | 133 | 274 | 407 |

ChiSquare 4.355ns